

学芸活動実践の指針書

「博物館を考える」を読もう!!



共立科学ブックス59として、糸魚川淳二著「続博物館だより 博物館を考える」共立出版発行1,400円が出ました。もうお読みになったでしょうか。まだ読んでないし、そんな出版物があるなどの情報も知らない……というのでは、博物館人としては失格だしエセ博物館人であると云われて

も仕方ありません。これ程熱情的で、実践的で、理論的なしかもわかりやすく具体的な博物館論の出版物が、これまでにあったでしょうか。

本紙44号(1979.3.25)の図書紹介で、筆者は前著「博物館だより ～ヨーロッパに原点をもとめて」を紹介しました。その時には、“今すぐにも、1章と3章をふくらませた糸魚川博物館学の実践と理論の新しいたよを書きあげてほしい、と切望しました。第1章「博物館をつくる」は、わずか21ページに、あっさりコンパクトにまとめられすぎているのが残念。読ませるのは第3章「博物館を考える」で、ここもわずか19ページという短編で、もっとも聞かせてほしいと思うばかりである。などと生意気にも論評したのでした。続編では、題名そのものがズバリ「博物館を考える」であり、第1章博物館のすがた — 世界の中の日本、第2章一つの小さな博物館 — 瑞浪市化石博物館にみる、第3章ある博物館論の3章で構成されています。

これまでも多くの論文があります。日博協の機関誌「博物館研究」や博物館学雑誌、あるいは諸々の単行本等に博物館論や博物館学理論が出ています。学芸職員論や博物館の諸機能に

ついても、多くの論述があります。しかし、ややもすると、どれもこれも机上の空論や理想論、こうありたいという願望や諸外国の事例紹介になりがちです。現実の、日本列島内での実体とあまりにも掛け離れた論調ばかりが目立つようでした。しかし、「続博物館だより — 博物館を考える」は、大学人であると同時に、長年博物館づくりの推進中核者であった著者自身の汗と涙の体験・実践の中から、そして世界中の博物館に精通した広い視野から生まれた理論大系であるだけに、具体的で説得力に富み類書にみられない熱情的迫力があります。これこそまさしく博物館学関係書物の金字塔です。

第三章ある博物館論、一問題の整理～現状のまとめに目を通してみましょう。あらゆる角度から、実的に確にコンパクトに、博物館界のかかえている問題点が浮きぼりにされています。それは、本紙の第1面、博物館の目でも、たびたび追求し論評し、問題視してきた点と共通する内容が多く含まれています。理念のこと、運営のこと、学芸員等職員ヒトのこと、常設展示のこと特別展のこと、資料収集や調査研究のこと、いわば一口にまとめてしまうならば、「学芸活動とは何か」につきます。

糸魚川先生は、本書のはじめにで“狭い範囲のことかもしれない、小さい経験かもしれない。”と書いておられますが、どっこい、とてつもなく広い範囲の巨大な体験論であり、すばらしい博物館学の聖典を与えてくださいました。全国各地で身体を張って博物館活動に従事している博物館人よりも、むしろ博物館をとりまくより多くの人々にこそ読まれるべき書物でもあります。博物館人にとっては、学芸活動実践の指針として座右の書とすべき教典です。(S.O)

歯の博物館

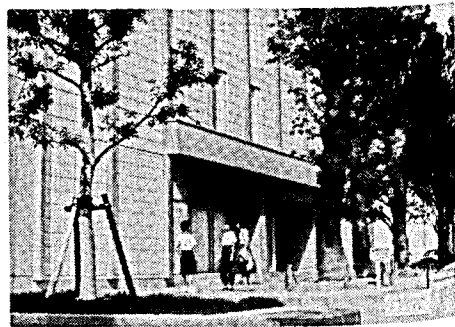
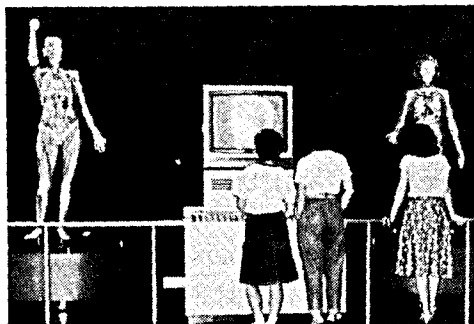
〒500 岐阜市加納城南通り1-18

岐阜県歯科医師会館内

TEL (0582) 74-6116 (代)

岐阜県歯科医師会では、理想的な歯科医師像の確立を目差し、新会館の建築に際して、研修室の充実はもとより、身体障害者が車椅子に坐ったままで受診できる歯科診療所、日本国内ではじめての試みである「歯の博物館」を設置するなど、会館施設の開放提供という社会還元の方途を構じられました。歯科医師会館であるだけでなく「岐阜県口腔衛生保健センター」として機能するわけです。正面入口からホールに入り、階段を二階へ登ると右手に歯の博物館があります。最初に目に入るのは、男女一對の透明人体模型です。中央のTV画面から映像による解説が流れ、それと同調して内臓各部や血液・リンパ液等の流れなどが光で示されたり、体全体が回転して裏面が観察できたりします。からだのしくみとはたらきを知るには、絶好の動く展示となっています。生きている自分自身でありながら、直接目に見えないということから、思いの外、私たちはからだのしくみ、各器官等については何も知らないのが現実です。一度じっくりと、この人体模型で、自分自身の内部構造に想いをはせてみるのもいいことでしょう。

(男女一對の人体模型とVTR映像展示)



(橋の大木がある正面玄関入口)

展示は、歯と人とのかわり合い、こわい歯、歯の治療今昔、歯肉の病気、口の中の病気、よい歯をつくる、学校歯科、歯を守るための社会のしくみ……と流されており、VTRやスライド等の映像展示も多くとり入れられ、児童生徒の関心や興味をひくように工夫がなされている。歯は全ての健康の土台となる大切なものであるだけに、こうした学習の場が公開され、歯への正しい理解が深まることはありがたいことです。

正面玄関前には、矢橋式日時計が設置されています。歯とどんな関係が？と思えますが、「世界で最も精密で一分以内の誤差にとどまるもの、科学の原点たる太陽の運行に思いをいたし、科学の一端をになう歯科医師の思想の糧としたい」とのことでした。欲を言えば、博物館の名をかかげた以上、「もの」によって語らせる展示を頼みたい気持が生ずる。少ないスペースで、より多くのことをコンパクトに紹介するために、多少図表類がこみ入りすぎるという印象を受けました。子ども会の行事で、あるいは家族連れで、ぜひお出かけください。入館無料です。

(いろいろな動物の歯の展示コーナー)



カメラ訪問 大垣市(国分寺)
歴史民俗資料館



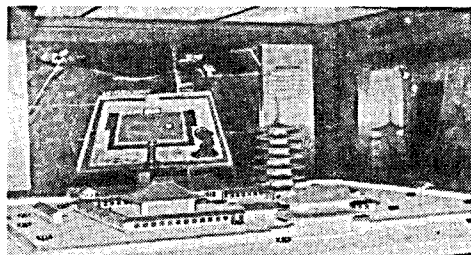
(国分寺跡の出土品と建築のようすのコーナー)



(石棺の展示)



(須恵器と土師器のコーナー)

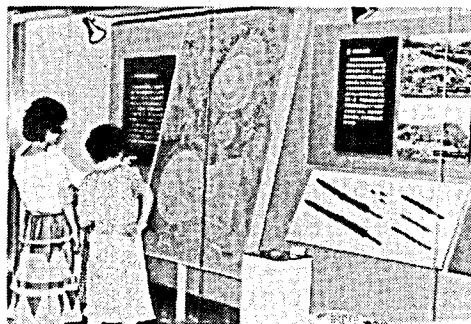


(美濃国分寺伽藍復原模型・
考古資料展示室入口正面)

(軒丸瓦・軒平瓦などの出土品コーナー)



(遊塚古墳復原模型や古墳出土品コーナー)



(民俗資料展示室の居間コーナー)



曲がり角に来ている“研修会”を考える

本音で語り合ってみませんか！

しんと静かな夜、時折り鳴く虫の声に秋の気配はいよいよ濃厚である。読書もはかどる。自己研鑽によい時季でもある。

当協会の会員が参加できる研修会も、岐博協セミナーを始め、今回の三県交流、東海博などあり、さらに日博協や各々の専門分野での研修会など機会は多い。また過去2回、学芸技術員講習会なるものも開催された。

全国でも屈指の館園数を誇る岐阜の博物館群。しかし、それらの博物館や郷土館の大多数は数人の職員で運営される、いわば零細の館園である。博物館の仕事は果てしが無い。次から次へと押し寄せる仕事の山に、毎日押しひしがれそうになりながら、それでも仕事を愛して止まぬ熱意の人々によって、館は運営されている。埃払いや居眠りで一日を過ごす人は稀だろう。

資料について知れば知るほど、彼らは声をあげ、その間を通るだけで雄弁に語りかけてくる。何とかして問い返してやりたいと思う。

彼らにどのように日の目を見させてやろうか、出版物や特別展などの方法論を考える。

押しかける見学者の1人1人に、どのように印象深く博物館として迫れるか、心を砕く。

あふれかえる資料を、限られた時間と人員でどう合理的にさばっていくか、頭を抱える。

— 博物館の仕事は、かくして、すればするほど泥沼である。深く深くのめり込んでいく。仕事をすれば、どんどん片付いていくといったものではない。あがきながら悩み、また考える。

どこの館園でも、こうした悩みを少なからず抱えているはずだ。埃払いや居眠りで済んでいようはずはなからう。

ひるがえって、冒頭に述べた研修会の数々。それらは余りにも通り一遍なものであるような気がしてならない。セミナーの地道な活動はともかくとして、いずれも単なるお祭りのな年中

行事と形骸化しており、そこで新しい発見があるということは、まずない。唯一の救いといえれば懇談会で懐しい顔を見て旧交を暖め、情報交換するといった程度のことだ。

我々に与えられている天与の時間は、あまりに少ないと思わないか？

研修会がその性格を変容するのが困難なのであれば、さらに別の試みをしてみなくてはならない。その一例として、あふれかえる資料を少ない人手でどう処理しようかと立ちすくんでいる人達よ、集まれ。一つの方法論として、コンピュータの導入がある。マイコンであれば今やさほど高いものではない。単純な資料の管理はたやすい。事実、筆者の館園で実証されている。ただレファレンスへの応用では、博物館界より一步論理的に先んじている図書館界でも、数館しか挑戦していないと聞くと、何故だろうか、あるいはどう失敗するのだろうか疑問が起る。こうした問題意識を持った人、集まれ。

資料の防虫・防霉にしても然り。幾多の薫蒸の講習会があり、立派な研究機関もある。その机上の理論に基づく完璧とも思える設備をした大きな館がいくつもある。しかし、館として使いこなしているところはまずない。だが公けにそれを言う館はない。「実は……」と実践者がもらすだけである。その設備とは何なのだろう。

こういった問題は、研修会といったネクタイ着用の場では話し合われにくい。さあ、みんな土器を掘った泥の手で、パネルを打ちつけた汗まみれの顔で、子供達に解説した喉がれの声で、集まれ。そして、本音で話してみないか？

恥を恐れないで、こんな馬鹿馬鹿しい初歩的なと思われるような毎日の仕事の上での疑問を率直に話し合える会を、家族的に岐阜県のどこかでもてたら……と願ってやまない。

(K.F)

67

県博移動展を開催して 変化に富んだ内容、各地で開催を!!

大垣市文化会館

「これ 本当に岐阜県におる動物かい」

「そうやろ」

「そんなら 鹿……おるかい」

県博の移動展がやってくる。折角の機会ひとりでも多くの人に見てもらうためには……。

県博の移動展の当地域での開催にあたって大丈夫かなと心配した主なものは

1. 時期的にみて大丈夫かな？
2. 帰化植物とほ乳動物 魅力は？
3. PRをどのようにしたら？

の3点でした。

時期的には

主たる対象が 小・中学生である以上、二期期がはじまったばかりのこの時期ではやはり無理と思われる。にもかかわらず1日平均230人ほどの参観者があつたことは、時期からみれば成功であつたといえよう。(9月9日～17日間、うち14・16日休館で総入場者約1,600人)

内容的には

県内に生息する帰化植物とほ乳動物が展示内容であるため 子どもたちがいかに魅力をもつてきてくれるか不安でした。しかし、日がたつにつれて参観者がふえたのは、特にほ乳動物に興味をもち口こみによる大きかったようです。身近かな動植物としての位置づけを 解説なり表示なりで工夫できなかったものかと思われまふ。

PR面では

今回は、主に学校、PTAの機関を通じてPRしたが、果して効果的であつたかどうか。従つて 会館のルートのみだつたわけで、市内に限られてしまつたが？ しかも ちらしによるのみになつたが。

今後の問題として

☆移動展の長期計画を

予算とのかかわりもあるが、文化施設間の交流も今後ますます必要となつてくるものと思われる。市町村文化施設での移動展可能を明らかにして申し込みによる企画はできないものだろうか。いろいろな移動展内容のメニューを期待したい。

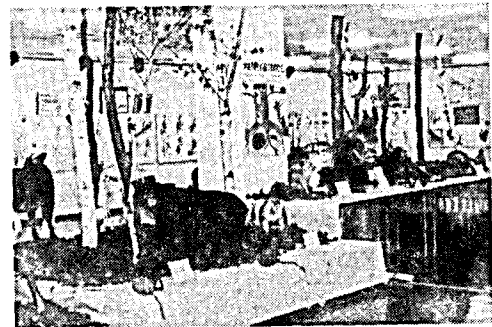
☆並行して行事を

展示と並行して植物教室とか〇〇教室を開いたらもっとちがつた面がでてくるのではなからうか。関連した学習会行事を期待したい。

いずれにしても 夏休みに「縄文の世界展」と県博にかかわる行事が続き、大垣市民にとっては県博を今まで以上に身近かに感じていただけたと思います。

夏休み中には、同じ内容の移動展が高山市で開催されたようです。県の施設と地方の施設がタイアップして行うこうした催し物が、定期的に県内各地で行なわれることを望みます。

(文責 久世博文)



「学芸員」国家認定 受験のすすめ

— 編集部より —

教員の資格が無ければ、学校の教壇に立つことはできません。医師の資格が無ければ、病院に医師として勤務することはできませんし、開業医となることもできません。ところが不思議なことに、博物館の世界だけは、「学芸員」という博物館専門職員の資格の有無に関係なく、学芸職員となることができます。勿論「学芸員」の資格があるからといって、学芸活動の実践家であるとは言えないし、無資格者でもすばらしい学芸活動の業績をあげている人は多くあります。大切なことは、名ばかりの「学芸員」資格の有無ではありません。博物館とは何かの理念をしっかりと身につけ、学芸活動を実行する実践人であればいいことは当然です。

学芸員となる道

しかし、博物館をよりよいものにしよう、博物館をみんなのものにしたい、生きている博物館をふやしたい……と願うならば、そこにある国家が認める「学芸員」なる資格を、まず身につけようではありませんか。学芸員養成制度の質的内容の問題、現状の学芸員資格制度の不備な点等は別問題として、有資格者「学芸員」の絶対数を増やそうではありませんか。

現在「学芸員」とするには、次のような道筋があります。必要な科目の単位（博物館学4単位、教育原理1、社会教育概論1、視聴覚教育1、博物館実習3）を、大学で修得する。あるいは通信教育で修得する。博物館学の講座のある大学へ進学する必要があります。通信教育で修得しようとするとなん万円と費用がかかります。国立社会教育研修所が行なう博物館職員講習会に参加して取得する。これは20日間ずつの2年間にわたる講習会で、かつての教員免許認定講習会のようなもの。現に登録博物館か博物館相当施設に勤務している無資格者が対象です。しかも、大学が人文系学芸員養成に傾いているために、自然科学系の学芸員養成を本来の主旨

としたものです。だれもが参加はできません。最も早い近道は……

最も手っとり早く、しかも門戸を広く開いている資格取得の道は、国家試験認定制度によるものです。たったの二日間、必須科目（博物館学、教育原理、社会教育概論、視聴覚教育）と選択科目2科目を受験するだけでいいのです。受験資格は、学士の称号があればいいわけですから大学卒業者、大学中途退学者でも2年以上在学、62単位以上を修得した人で3年以上博物館にいる人、高校卒でも博物館で（学芸員補）6年以上学芸活動に従事している人、教員の免許があり5年以上教職にあった人……などです。しかも、大学時代に単位修得の科目は試験免除されます。具体的な事例として、現に教職員で理科の免許を持っている人の場合を考えてみましょう。選択科目は、大学時に、地学なり生物学なり化学・物理学なりを学んでいますから受験を免除されます。教育原理も免除、だとすると、博物館学（筆記と口述試験）社会教育・視聴覚教育の三科目受験（大学時に視聴覚教育の単位取得者はこれも免除）ですみます。国家試験は毎年1回文部大臣が行なうことになっています。不合格科目がある場合は、次年度にその科目だけ受験できます。教員資格のある者にとっては、一番近道ですからどんどん受験すべきでしょう。高校卒の受験資格者は、最大の6教科とも受験しなくてはなりません、コツコツ勉強して合格している人も多くあります。少し前と違い、博物館学全集も出版され、かつてのように「博物館学」の試験が難関とも言えなくなりました。受験は各県の教育委員会社会教育課を通して文部大臣に願ひ出ることになります。

より多くの博物館関係者の受験をおすすめし、学芸員資格保持者の増加を望みます。

≡≡ 図書紹介 ≡≡

講談社カラー科学大図鑑

日本の博物館

日本博物館協会編

カラー写真を主にした豪華なシリーズもの「世界の博物館」「日本の博物館」を世に出した講談社から、小学生向け科学大図鑑シリーズの一冊としてまとめられたもの、59ページという限られたスペースの中に、日本の博物館界のようすがうまくコンパクトにまとめあげられ、カラー写真150枚ほども、とても美しく見ごたえのあるものばかりです。

わずか半ページ足らずの短い解説ですが、博物館の起源から説きおこし、いろいろな博物館を内容ごとにとりまとめて紹介しています。二色刷4ページを使い、博物館の利用法を親切に解説し、巻末には全国の主要な博物館の所在地を8ページにわたり載せています。

博物館建設ブームを後追いつめるかのように、最近では、博物館利用を促す出版物が本屋さんの店頭を飾るようになり、また雑誌「太陽」でも特集するなど、博物館界にとってはうれしい限りです。「父と子の博物館」富士書店、「科学博物館への招待」東海大学出版会、「博物館を生んだ町、東日本編・西日本編」恒和出版、「東海の博物館—郷土資料のすべて—」中日新聞本社、「全ガイド日本のミュージアム、東日本編・西日本編」朝日新聞社、とガイドブックも賑やかとなりました。これらが家庭向きとはいえ、やはり大人を対象とした一般図書であるのに対し、児童図書としては日本で初めてのものとして注目される。

内容的にも設置者にしても、とにかく種々雑多でまとまりようがないとも思える博物館の世界ですが、いろいろな博物館を、美しいカラー写真で、「宇宙と地球」「大むかしの生物」「植物と動物」「むかしの生活」「民家と民具」「江戸村や明治村」「明治時代のもの」「乗りもの」「科学技術」「スポーツ」「切手やお金」「時計やカメラ」「楽器」といった大項目に分け、それぞれ全国各地の博物館の展示品を紹介しています。たとえば「む

かしの生活」では、群馬県立歴史博物館の再現された岩宿人の生活、井戸尻考古館の縄文土器、登呂博物館の復元された高床倉庫、京都国立博物館の祭り用の銅ほこ……が紹介され、「大むかしの生物」では、国立科学博物館、大阪自然史博物館、秋吉台科学博物館、横須賀市博物館の展示品が登場するといった具合です。

ただ欲を出して見ると、不満な面もあります。全編を流れる資料紹介の基調に“時間的に長く経過した珍品奇異なもの。”という雰囲気強く伝わってくることです。その典型的な事例が16～17ページで扱われている「植物と動物」の項目です。ここではメタセコイヤやオウムガイ、シーラカンスといったものと動物園が紹介されています。しかし、博物館自然史分野は、ここに登場する化石的動植物だけを資料として扱っているわけではありません。地球的規模での自然破壊が進む現状の中で、博物館こそは、『自然教育』の中核機関である必要があります。身近なありふれた動植物の世界をこそ扱い、自然のしくみ、自然とヒトとの叙事詩を物語らねばなりません。博物館の社会に果たす役割の多様さにも、今少し紙面を費やしたら……と思えます。

しかし、児童図書としては、類書がないだけに、タイムリーな出版物で好感がもてます。科学大図鑑シリーズの一冊であるだけに、展示資料紹介が中心となるのも当然ですが、続巻として「博物館利用術」の児童図書の出版を望みたいものです。(S.O)

原稿募集 ◎新しく収蔵した資料の紹介、目玉展示資料の解説、こんな事業を行ないました、入館者の動向、博物館活動に思うこと、学芸活動の実践報告……博物館にかかわることなら何でも結構です。長短編期日を問いません。どんどん寄稿下さい。事務局編集室まで。

歴史民俗資料館誕生ラッシュ

大垣市(国分寺)歴史民俗資料館

本紙P3で写真紹介しました。去る7月18日に仮オープンし、無料公開中。10月5日に完成式。本オープン後は入館料大人100円、小人50円。国の史跡 美濃国分寺跡は、昭和43年から発掘調査が進められ、その全貌が現在史跡公園として整備保存されました。資料館は、この事業に関連し、出土品を中心に、市内の古墳資料及び地方の住民生活をしのぶ民俗資料(同市江東小学校民俗資料収集品)を展示公開、保存するもので、延べ面積850㎡余、工費1億9千万円余、大垣市青野町、史跡美濃国分寺跡に隣接して建設されました。

関ヶ原町歴史民俗資料館

不破郡関ヶ原町関ヶ原、陣羽野公園近くに、歴史の町にふさわしい古典的長塀の建物がお目見えしました。工費1億4千万円余をかけた資料館で9月16日開館。展示の目玉は、同町郷土館にこれまで保管されてきた「関ヶ原合戦びょうぶ」を始め“天下分け目の関ヶ原の戦い、に関する歴史資料が中心、外に民俗資料も展示されます。

不破の関資料館

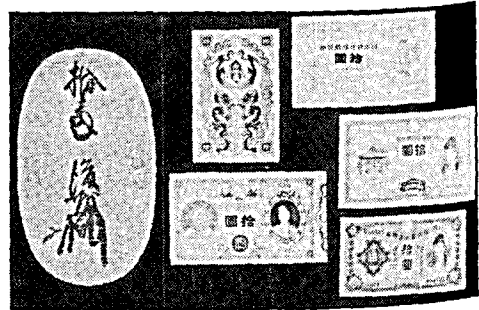
不破郡関ヶ原町松尾、不破の関跡に開館、不破の関発掘調査の成果をもとに、銭貨、かわらなどの出土品や、不破の関全体を復元した模型も展示されています。

馬瀬村歴史民俗資料館

馬瀬村役場前に建物は完成、11月3日文化の日にオープンする予定で整備中。歴史資料展示室、民俗資料展示室の二室があり、村内から出土した考古資料、あるいは古文書、絵画、掛け軸、それに村内に伝わり残されてきた民具等が

展示されます。鉄筋コンクリート平家建て311㎡、工費は4,700万円、村では昭和55年度から文化財調査・資料収集を行なってきました。

県博特別展 東洋の貨幣へどうぞ



10月1日～10月31日まで、東洋の貨幣の源流とも言うべき「貝貨・刀貨」を始め、中国・朝鮮の貨幣、わが国最初の鑄造「和同開珎」あるいは世界最大の金貨「天正大判」江戸の古紙幣、明治以降の近代的貨幣等が展示され、さまざまな貨幣の変遷をたどります。会期中10月11日(日)には講演会「貨幣の歴史」(東海貨幣研究会長 鬼頭晴彦氏)、10月31日(日)には人文教室「美濃の諸藩と藩札」(岐大助教授松田之利氏)が行なわれます。参加申込みは電話、はがきで下記へ。〒501-32 関市小屋名 岐阜県博物館教育普及係 TEL 05752-8-3111(代)

編集後記

- ◎博物館の目にありますように、名古屋大学糸魚川淳二先生の労作、ぜひともお読みください。ご感想・ご意見等気軽に本紙にお寄せいただきたいものです。(Y.S)
- ◎博物館学なる学問があり得るのだろうか、博物館教育とは、方法論や技術論は?……どの活動分野をみても未熟・未開拓な面が多いだけに、逆に学芸職員の学芸活動実践その交流こそが望まれます。研修会への提言、いかが思われますか。(S.O)